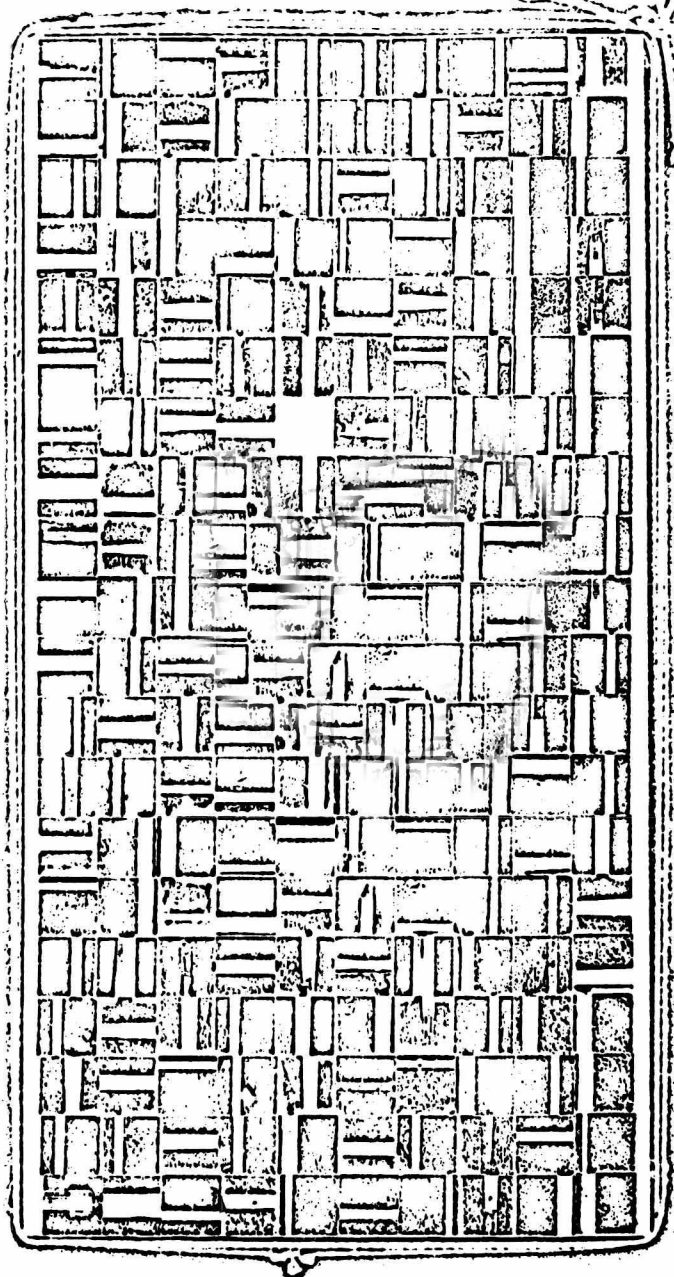


6

鮎川信夫著作集



鮎川信夫著作集 第六卷

文明論 海外詩人論

発行一九七五年二月一日 著者鮎川信夫 装幀粟津潔 発行者小田久郎 発行所株式会社思潮社
東京都新宿区市谷砂土原町三一五 電話東京二六七―八一四一 振替東京八二二一 印刷福田印刷
製本美成社製本 製函岡本紙器 用紙北越製紙 表紙日本クロス © 1975, Nobuo Ayukawa

目 次

自伝の真実について 8

政治嫌いの政治的感想 15

青年と老人 21

我慢しやすい政治を 民社党・西尾末広氏へ 26

秘書と桜姫 29

ベトナムの鼠 33

歴史におけるイロニー 橋川文三氏の論文を手がかりとして 37

一人のオフィス 単独者の思想

英雄はねむっている 54

笑ってもいいんだ 58

無邪気な無関心よ 62

流行歌よ、おごるなかれ 66

生きている群衆の個性 70

幸福と不幸の間一髪 74

親を見ること子にしかず 77

兇悪殺人犯の自己主張 81

裁きは終わった…… 85

“大学当局”とは何か？ 89

先進国はイジワルか…… 93

先手必勝主義の要諦 97

生存競争のスタート 101

ときどき素顔に返れ 105

自動販売機的な言論	108
セックス産業化時代	112
神なき時代の絶対者	116
散歩を楽しむ人生を	120
流行は過剰で終わる	124
スピードを創造する男の死	128
国をいかにして守るか	132
女性としての第二の人生	136
家庭の幸福と小暴力	140
ドラマ「原田対ジョフレ」	144
紀元節復活論のゆがみ	148
いつかトビラは開く	152
父と子の救えぬ対立	155
国会は社会のカガミ	159
しのび寄る食糧危機	163
「人間」とはいつたいいんだ	167
ベトナム戦・二つの幻想	171
日米の対話を前進させよ	175
ゴルフに罪はない	178
米中和解の決めダマ	182
テレビ文化と活字文化	186
交通事故この複雑なもの	190
頭脳流出の国家的損失	194
役に立たない既成通念	198
国威のセールスマン	202
正しい愛国心とは	206
小さな悪事の日常化	209
サルトルは何をいった？	213
こんにちの新しい不安	217
攻撃性が発揮されるとき	221
事実だった日本の虐殺行為	225
放出ダイヤめぐる複雑な気持ち	229
おかしい建国記念日論	233
人はなぜ車を持ちたがるのか	237

時間の流れは止められない

241

「たしかな考え」とは何か

249

可能性のビジョンで見よう

245

急いでいるのに邪魔っ気な群集め

253

進歩主義者の限界

265

わが師わが友

275

ドライバーの嘆き

277

私的戦術

280

遊びによる自由

296

体制をはみだす若者たち

300

世代雑感

304

戦占い

307

傷痍軍人療養所で

311

ヴァレリイについて 314

カフカの世界 320

ボードレールについて 近代的心情 335

T・S・エリオット 350

ウィリアム・パロウズ 355

ポオとボードレールの記憶 362

伝説の人・ヘミングウェイ 366

解説

ほんとうの言葉——戦争責任に沈黙する日本人の中で——奥野健男 376

傍観者の肉眼——中村稔 384

*

編集ノート——三好豊一郎 394

掲載誌紙一覧

文明論 海外詩人論

自伝の真実について

自己を語るということは、比較的近代の流行である。自伝 (autobiography) という言葉を最初に使ったのは、十九世紀始めのイギリスの詩人ロバート・サウジーだと言われている。autobiographyのautoは自己の意の複合辞であり、それにギリシア語のbios (生涯) と grapho (われ書く) が合成されてこの語ができているが、自伝が多数出版されるようになったのは十九世紀以後の現象といつてよい。それは、内省的な回想記、旅行記、文学的書簡、日記などがさかんに書かれるようになったのと同じく、自我意識の発達と、それに附随して自己表現の欲求が強まってきたことによるのであろう。

古代や中世の世界には、近代的な意味での自伝的文書といったものはほとんどない。単に個人の記録というだけなら、エジプト人、アッシリア、バビロン人の昔にまでこれを求めて遡ることができるが、彼等の文化は私たちが口にするような意味での個性のしるしを持っていない。したがって、陶土や石に書き残された個人の事蹟はあっても、そこに内面生活の表現が全く見られないのである。

そして、古代ギリシア、ローマの世界においても、事情はさして変らない。クセノフォンの『ソクラテス追想』やプルタルコス英雄伝などの画期的な伝記があらわれたが、自伝といえるものは見当たらないのである。さらに一千年におよぶ中世キリスト教の世界では、自伝はおろか伝記といえるものさえなく、わずかに型にはまった聖者たちの修道生活の一面が伝えられているにすぎない。

この間における唯一の、偉大な例外として挙げられるのは、アウグスティヌスの『告白』であろう。紀元四百年頃

ラテン語で書かれたこの書は、一個人の精神形成過程と生活の内面史をめんみつに記録している。そして、信仰の深さと教養の豊かさをかねそなえ、真摯な自己省察をふくむこの書は、古代世界における最も感動的な魂の記録と呼ばれている。

しかし、アウグスティヌスの告白が、今なお心をうつとしても、その意識の次元は、近代人のそれとは全く異なっている。ルソーの告白と対比すれば、その相違はおのずから明白であろう。贖罪を前提とした告白と、独立した自我意識に発する告白とは、根本的にちがったものである。前者は、超越的な神に救いを求める宗教的態度であり、後者は、自己の内部の論理的発展によって、自己拡充を目ざす人間中心の態度である。

個我意識の発達史にも、おそらくいくつかの段階があるろう。さまざまな文書や記録によって、非常にゆっくりとしたその発展の跡を、漸進的にたどってみるのも興味があるかもしれない。そこには、各時代の社会的変化に対応する、人間の内面生活の質的变化といったものが認められるであろう。しかし、ひっきょうわれわれは、ルネッサンス以降近世に至るまで、独立した個人的内面生活の完全な見本を見るわけにはゆかないのである。

キケロ、マールカス・オーレリウス、アウグスティヌスは、偉大な個人であった。アペラール、ダンテ、ペトラルカも偉大な個人であった。そして、彼等は、それぞれの方法で、ある程度まで自己を語った人々である。だが、近代の先駆者となったルソー、ミル、ニイチェなどの個我意識とくらべると、彼等のそれは、何と遠く距たってみえるとか。

私たちは、個人性というものに、二つの異なった型、有機的なそれと形態的なそれとがあることに気づかないわけにはゆかない。前者は、たとえばルソーのように周囲から独立した意識生活を営むが、後者は、生活環境の型としてしか経験されないものである。海賊ヴァイキングとかベドウィン人とか中世初期の修道僧などでは、つねに集団の意識が個人の意識よりも先に立っていた。彼等にとって、集団から独立した個人というものは考えられなかったのである。

古代人、中世人にあっては、社会的背景がそのまま彼等の生活を意味していた。エジプトの壁画、ビザンチンのモザイク、あるいは中世の装飾画などに描かれている人々の一つ一つの顔は、けっして個性を主張せず、背景に収まり、背景と一体化している。そこには、いわば背景の前面において演じられる個人の劇といったものがない。

近代人の場合はどうか。社会的背景と個人の生活は、はっきり区別されるようになる。「われ思う、ゆえにわれあり」と言ったデカルトは、疑うことによって最初の近代人となった。過去の伝統と現在の常識の一切を疑って、はじめて考える自我の实在性につき当たったのである。

近代世界におけるもろもろの進歩的概念は、このような考える自我を土台として生れ、個人の意識の環境からの分離ないし断絶を前提としている。デカルトは、最初にその方法的自覚の極点に立った人である。だが、これに先だって十六世紀に、宗教的個人主義ともいべきプロテスタンティズムの運動があったことを忘れるわけにはゆかない。さらに、印刷された聖書は、ローマ教会の権威をゆすぶるほど普及していたのであり、宗教改革の機運を大いにたずけていた。したがって、そこには近代的合理主義の芽生えるべき社会的条件がととのいつつあったことも指摘されよう。ともあれ、ルネッサンス史の断面は、キリスト教世界の崩壊にともなう外的権威の衰退から、さまざまな個人主義がうまれるという、興味深い事実を物語っている。

結果として、近代世界は、社会的物質的にめざましい進歩をとげることになった。個性の自覚は近代文化の根であり、政治も、芸術も宗教も、ここを基点として高い文明度に達したのである。しかし、一方において、自我意識の発達にともない、地位を目ざす人間の争闘が、社会的にいちじるしく厄介な現象を呈するようになってきたことも否めない。共同社会と個人との間に不安な裂け目ができたのである。ジュリアン・ソレルやラスコルニコフの意識の重要な部分は、その裂け目の病的産物といえよう。

奴隸制支配の古代社会や身分制支配の封建社会にあっては、地位の不安定ということはありえなかった。が、近代

社会はたえず変化してゆく社会であつて、人間の地位は不安定なものとならざるをえない。この不安定からいわゆるアウトサイダーが生まれ、犯罪や革命の可能性が生まれるのである。

時をえない、あるいは所をえないということは、もちろん個人にとって大きな不満となる。しかし、さらに恐るべきは、個性の挫折であり、自己喪失である。自己喪失が一般化すれば、正常な社会感覚を失い、戦争や暴力を受け入れられるようになるかもしれない。ラスコルニコフをうけいれ、ニイチェをうけいれた者にとって、ヒットラーが受け入れにくい理由はないのである。いずれにしても、個人の危機が社会の危機に転化してゆくところに、近代世界の決定的な特色をみることが出来る。個人と社会との関係は、動的であり、弁証法的であつて、全体主義者が考えるほど、その関係は一方的なものではない。すくなくとも、ある程度まで民主主義の発達した社会においては、社会と個人との間に微妙な緊張関係が、たえず存在しているのである。

近代人の自己表現の欲求も、究極的には、このような個人と社会との関係の中に根拠がある。それは、自己表現によつてのみ、社会と結びついてゆくという理想に励まされているといつてもよいであらう。そして、この理想のあるところに、社会的全体と個人的主体とを調和し綜合する立場というものが、はっきり認められるのである。むしろ、自己表現とは、詩人や作家の専売でもなければ、言葉によるものだけを指してはいない。人間的な表現の、あらゆるかたちが、考えられていいのである。

問題を近代文学の面にかぎつて言えば、あるいは言葉による自己表現が氾濫しすぎているかもしれない。私は見た、私は聞いた、私は知つたと言うときの「私」に、いったいどれだけの値打ちがあるかという、しごくもつともな疑問も出てこようというものである。

特に自伝や告白の「私」は、現実の私との連関に立つて、ともすれば拘束なき個人主義といったものに陥りやすい。自己の生き方を正当化したい気持は誰にでもあるだろうが、そのために独善に陥り無益に他者を傷つける惧れがある。

また、照明のあて方ひとつで、「私」の個性を、かなり違ったものに印象づけることもできる。とすれば、真実よりもいっそう自己を美化してみせたいという誘惑に、なかなか克てるものではないだろう。(もっとも、日記における「私」は、他人に自己を誇示するものではないから、自伝における「私」とはいちおう区別されなければならない。)自己欺瞞は、程度の差こそあれ、自己防衛の本能と同じく、たいいていの個人に認められる自然な性向である。

だが、そのような自己欺瞞は、人を欺くよりも、自分自身を欺くという点であやまっている。忌むべきは、ただ自己を支えるためにのみ、必要とされる観念である。拘束なき個人主義の袋小路には、このような観念の自家中毒患者がうようよしている。ここでは、わが道をゆく悪名高き資本家の個人主義のみが、ひとり大手を振って闊歩しているのである。

個性のない作家が、虚栄からうわべだけの個性を装ったり、些細な特徴を誇張するのも近代文学につきものの個人主義的弊害である。この傾向は、もっぱらロマンティズムの諸運動の悪い影響によって促進されてきた。自己を語る場合の誠実さが、このような見せかけのテクニクにすりかえられるならば、やがては個人にたいする相互信頼の念が失われてしまうだろう。これについては、文学は自己表現にとどまるものでもなければそれに拘泥するものでもない、という反論も出てくる。エリオットのように、個性からの脱却を説く詩人もいるわけである。

それなら、問題をもとに戻して、自伝とか告白の文学のもつ意味は、いったいどこに求められるであろうか。もちろん、自己表現の欲求ときりはなして考えるわけにはゆかないが、それだけで律することもできないはずである。むしろ、純粹な自己表現を目ざす芸術的衝動とはかなり違った、個人あるいは社会のモラルに動機をもつと思われる場合が多い。

まず、人間的経験の真実性ということに問題をかぎってみよう。すでに述べたように、自己を語ることにはさまざまな危険や障碍がともなうにもかかわらず、人間は真実の自己を求めているといえるのではないだろうか。行動の領

域においても、思想の領域においても、われわれはなんらかの意味で眞実なるものを求め、発見し、実現してゆこうとする。人間は、一時的な快楽や興味だけで生きられるものではない。空無には耐えられないのである。ラスコルニコフは、「ただ生きること、生きること！　どんな風にもいいが——ただ生きること！」と叫ぶ。

どんな風にもいい、ただ生きること、力をかしてくれさえすれば、それを眞実と呼ぶのになんの躊躇もないだろう。虚偽でも瞞着でもいいのである。ただ、虚偽や瞞着は、事実に基いていないため、一時的なごまかしにすぎず、けっきょく生きることに力をかすことにならないだけの話である。

事実は、われわれの存在より永続するところの、この世の唯一の成長的なエネルギー源である。眞理は、この源泉からのみくみとることができるといふ。この意味で、眞実を求める人間にとって、まず必要なのは事実に直面する勇氣といふことになる。そのためには、どうしても客観的に物をみる力が必要となる。

すぐれた自伝、日記、回想記などを読んでみて、深く印象づけられるのは、まず自己を客観的にみる能力の強さである。

いかにそれが偉大な経験であっても、主観的個別的なものにとどまったのでは、人生という広く深い総体的事実の前には無力なものとなってしまふ。

だが、今さら客観化の重要性など説くまでもないことかもしれない。これなくしては、経験の個別的な眞実性を、普遍的な眞理にまで高めることはできないからである。

しかし、人間の経験には、おのずから限度がある。普遍的絶対的眞理とみえたものが、状況の変化によって、単に個別的相対的なものとなってしまうことがある。特に個人の世界観、人生観の眞理は、変りやすいという点でおおかつた当にならない。遠近法ひとつで、この世界のすべての様相が変ってしまうのである。それだけに、すぐれた遠近法を身につけなければならないということにもなるだろう。また、どんな遠近法によっても変ることのない世界観をも

つことが理想であらう。

個々の内的経験の深さといったものは、たやすく測定されるものではない。さりげない日記の一頁に深い真実が隠されていることもあれば、もっともらしい大げさな告白に砂粒のように嘘がまじっていることもある。内的経験の真偽、比重については、軽々しく判断を下すことは禁物である。ほんとうの自我は、われわれの眼に見えないところ、手のとどかぬところにあるのかもしれない。深淵の底は、いつも暗くよどんでいて、うっかりすると深度の測定をやまるおそれがある。だが、深淵と思ったものも、単にそこを照す現実の光が弱かったにすぎない場合も多い。どんな現実の光によっても、その底を見せない深淵があるなら、それを見たいものである。

結論として言えば、たいせつなのはものをみる遠近法と現実の光、ということになる。それだけが決定的な要素である。そして、これはとりもおさず、自伝や日記の筆者たちの真剣に求めていたものなのだと思う。彼等の自己分析や自己啓示に、どれだけ強い衝迫力があるにしても、そのことを直接の目的として、これらの文書が成ったわけではない。

最後に、これらの文書の筆者たちにたいする礼儀として、私たちはただ肩越しに彼等の人生の、ほんの瞬間をかいま見たにすぎないのだということを書きそえておこう。さもなければ、彼等の苦悩をよろこびとしたことの償いはつきそうもないからである。